

ブログ名

Shuguan Kokeshi Collect.

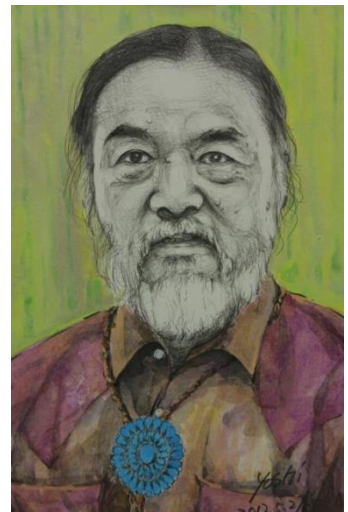
ブログ用ニックネーム

toshi1040

「清俊夫さんは、上記ブログで、2006年6月10日から2009年8月20日まで、78回に渡って、今晃さんのこけしを解説されています。」

清 俊夫

- ・山口県宇部市東須恵755-13在住
- ・昭和21年10月12日、秋田市生まれ
- ・昭和45年9月、鳴子全国こけし祭りに出会い、収集を開始する。伊藤松三郎さんの踏み轆轤作品、佐藤巳之助さんの強烈なこけしに惹かれ、8寸で全作品を集め、阿部常吉さんに魅かれ集めた。松田精一さん、北原鉄蔵さん、佐久間芳雄さんも多く集めた。津軽の風絵、津軽塗をも蒐集。
- ・昭和56年11月、こけしの館で今晃さんと出会い、おもちゃや装身具を蒐集。昭和末年まで集中的に集めた。
- ・平成2年2月、山口県宇部市に移住、ブログ「shuguan kokeshi collect」発信。平成5年3月より、アメリカ先住民ズニ族の装身具の収集を始める。
- ・平成22年11月 最初のズニ族の宝石の本 *Knifewing and Rainbow Man in Zuni Jewelry* (The Schiffer Publishing) を出版する。以降、6冊出版する。





「1」 4寸重ね菊帯付き、作りつけです。昭和57年4月10日に弘前城の側にあった「ねふたの館」で、今さん本人から入手しました。4寸という小寸物にもかかわらず、形態といい、面描といい、その完成度は素晴らしいものがあります。張り詰めた、やや上目使いの凝視力の強いこけしだと思いませんか。

今さんは、昭和56年の鳴子こけし祭り終了後、岡崎斉司さんの元を弟子上がりして、弘前に戻ってきました。そして、同年の冬から本田功さん、長谷川健三さんとともに、「ねふたの館」に隣接した「こけしの館」で働き始めました。初めは、こけしを作らず、それ以外の木地玩具だけを作っていましたが、57年の1月下旬からこけしを作り始めました。初めは習作といっても構わないと思われるものでしたが、3月末、4月初めとなりますと、このこけしにありますように、充実感のある形態、描彩、表情となってきました。もちろん、6寸、8寸も素晴らしい量感と充実した面描ですが、4寸でも、この量感を出せるということで、このこけしを掲載することにしました。



「2」 「1」と同じ時期の金次郎型4寸黄胴笑い口帯付きです。底には、私の字で「57年4月初」と鉛筆書きしております。入手年月日を書いていないのは、すぐ母のところにお土産にしたためだと思います。後で、惜しくなって、母に別の今さんのこけしと交換してもらいました。これもまた、形態、描彩、面描ともに充実したこけしだと思っています。当時は、弘前の郊外にある金属団地に住んでいました。弘前の桜祭りは、4月下旬ですから、忙しくなる直前の、「これから」ともいう時期でした。1月末からの習作期が終わり、充実期に入った頃の作品であると思っています。みずみずしさと充実感があいまって、魅力的なこけしになっています。筆法的に言うと、鳴子以前のこけしは基本的に同一なのではないでしょうか。結婚して禰宜町に移ってから

もしばらくは同一でした。しかし、嶽に移ると、南画風あるいは俳画風の筆法に変わり、この線は出なくなります。今さんは、あまりに自分の意のままになる筆法に飽き足りなくなって、それを捨て、自分の自由になりにくい、不自由な筆法、偶然の要

素の強い筆法に挑戦したように思います。「その不自由さを何とか自らのものにする。」という矛盾の統合を目指した、とでも言ったらよいのでしょうか。ですから、この筆法の新しいこけしには、もうお目にかかることはないように思います。こけしは、時代の所産ですから、時代を越えることはできません。復元と言い、写しと言い、時代をさかのぼって、今に昔のこけしを蘇らせようとするのは、所詮無理なのでしょう。ですから、昔のこけしを越えたかどうかという議論は、問題の立て方が、初めから間違っているのです。その人のこけしとして、完成度が高いかどうか、質的に充実したものかどうかを見ていけばよいと思っています。

また、ピークのこけしと言う表現もどうかと思っています。人によっては、充実期は何度もくるのではないのでしょうか。ある一時期だけをピーク期とすることは、その他の時期を、否定することにつながらないのでしょうか。むしろ、その変化を楽しみ、また、比較せずに1本だけを見て、心惹かれるものがあるかどうかを問えばよいのではないのでしょうか。



「3」 金属団地に住んでいた頃の1寸3本組です。昭和57年の8月10日の作です。

1寸という小ささにもかかわらず、形態、描彩ともかなりの完成度を示しています。線の質は、嶽初期に共通するものが見て取れます。それまでの線のきれいさ、美しさから、強烈さ、泥臭さを出すための線に移行しつつあるときの作品と考えられます

「4」 1寸3本組みと同時期に製作された2寸5本組です。この5本組でも、眉や目鼻の線は、金属団地初期とは異なっています。意識的に、線の質を変更しているように見えます。「1」や「2」と比べてみてください。こ



の中で、私が好きなのは、伊太郎型です。この伊太郎型を作り始めたころの充実感が、1寸にも、2寸にも見て取れます。重ね菊や黄胴笑い口帯つきは、形態的には、その「1」や「2」の方が緊張感に溢れているように、私には見えます。でも、描彩を含めて、どちらが好ましいかは、見る人によって異なるでしょう。きれいさを取る人はその「1」や「2」を、泥臭さや津軽らしさをとる人は、この金属団地後期を取るかもしれません。それでいいと思います。私はといえば、「どちらも捨てがたい。」としか言いようがない、というのが本音です

「5」 4寸6本組です。すべて、57年1月の復活初作です。右から3本目の作り付けの笑い口のみ、1月11日の日付けが、今さん自身の筆跡であります。おそらく、試作品として保存していたものを、後からいただいたのだと思います。後の5本は、1月25



日の日付けが、私自身の手で記入されています。この写真にありますように、笑い口と細身のこけしは、作りつけと鳴子式のはめ込みの二通りで作られています。私は、こ



の金属団地初期のこけしを、習作期と位置づけています。でも、この時期のこけしが一番好きという方もいらっしゃるでしょう。左から2本のこけしの原は大浦泰英さんが、金属団地にいた頃に持ってきたこけしだそうです。「原はもっと太かった。肩ももっとふっくらと張ってあって、作りつけであった。」そうです。

「6」 伊太郎型 6寸です。昭和57年11月末の作です。今さんは、10月に金属団地から市内禰宜町に転居し、同時にこけしの館を離れます。住居に付属した物置小屋を改造して轆轤をすえつけることを計画しましたが、注文していた轆轤の到着が遅れ、禰宜町での初作は11月に

なります。この伊太郎型は、8寸を原寸としたものですから、6寸であるのが惜しまれます。表情的には、「3」および「4と」同じですが、線の性質は大きく変化しています。太く強い線となっています。



「7」 6寸と8寸のこけしです。鳴子の岡崎斉司さんの元に、修行のし直しを目的に弘前を離れる前のこけしです。8寸は、黄胴帯付きで、胴底には、「弘前 今晃」の署名があります。鳴子以前の弘前時代のこけしには、弘前の文字の加えられた署名が多いように思います。6寸は、黄胴笑い口帯付きです。署名は「今晃」のみですが、キナキナ風の木地、描彩とも鳴子以前の弘前時代のこけしでしょう。このこけしには、うすくほほ紅が入っています。8寸のほうの木地も、キナキナ風に近い形態になっています。鳴子以前の弘前時代の鑑別のポイントは、木地の形態や表情を除くと、署名でしょう。弘前の文字が入っ

ていれば明らかですが、入っていないくても、晃の文字の光の部分の点が楷書体で入っていれば、この時代と考えてよいようです。

このこけしたちを見ると、今晃さんの描彩力は、再修業に鳴子に出る前から、一流だったことがわかります。それに、形態の生成力が一段とレベル・アップするのですから、今さんのこけしを見る目、あるべきこけしを幻視する力とあいまって、鳴子後の今さんのこけしが超一流になるのは、自明のことだったのでしょう。

「8」 鳴子修行時代の岡崎家のこけし7寸(56年8月30日作)です。今さんは、昭和56年の鳴子もみじ祭りを最後に、鳴子での修行を終えます。このこけしは、師匠の斉司さんの勧めで、56年の鳴子こけし祭りの奉納こけしのために製作されたもののうちの一本です。斉司さんがとっておいたものを、後日、秋田の桑原さん、今さんと一緒に鳴子を訪ねた折りに、斉司さんご自身から、「今を今後ともよろしく願います。」という言葉とともに、直接譲っていただいたものです。



形態的には、完全に岡崎家のこけしです。斉司さんや大沼秀雄さんが常々おっしゃっている、頬から首にかけてのアールも完璧でしょう。面描も完全に鳴子ですが、表情は、これも見事に今晃さんのものです。これから、今晃のこけしを作っていくのだ、というマニフェストのようにも思えます。瑞々しい、張りのある鳴子こけしではないですか。

「9」 鳴子に修行に出る前の今晃さんの3寸こけし5本です。すべて作り付けで、左から一本目、三本目、四本目は、胴底の署名が「今晃」のみです。おそらく、辰雄さんの木地下を挽いていたころのものと思われます。残る2本は、「弘前



今晃」と入っています。初めの3本のうち、笑い口を除く二本の口は、紅のみで描かれていますが、「弘前 今晃」の署名の手は、二本の墨の線に紅がさされています。この「弘前 今晃」の署名の入ったものは、辰雄さんの息子健三さんが帰ってきて、今さんが辰雄さんの元を離れた時のもの、52年から53年3月までのものと思われます。このことから、鳴子以前の今晃さんのこけしには、「今晃」のみの署名のものと、弘前が入った「弘前 今晃」署名のものの二通りがあることになります。前者の方が、より古いことになります。



「10」 鳴子に修行に出る前の笑い口黄胴帯びつき7寸3分と、オド菖蒲7寸6分です。笑い口7寸3分は、「7」にはほぼ紅を差した6寸を載せましたが、これにはほぼ紅ありません。太い胴体にキナキナ風の造りで、角ばった頭が載っています。胴底には、「弘前 今晃」の署名があります。昭和52年の作と考え

られます。7寸6分のオド菖蒲は、金次郎型の形態に菖蒲模様であることから、父親や叔父を意味する「オド」の菖蒲の型という意味でしょう。ほうのき材で、やや肌理の荒い地に、ざっくりした線が、昔風の表情を生み出しています。胴底に、「今晃」の署名があるだけで、轆轤の爪の後も見えません。鉋で削り落としたもののようです。このオド菖蒲は、私の好きのこけしの1本です。この場合も、「晃」の字の光の部分は、はっきりと書かれています。その点で、鳴子から帰ってきた後の「晃」の署名とは異なっています。昭和51年の作と思われます。



表情に違いの出る好例と思われます

「12」 当時、弘前市門外に住んでいた今晃さんのこけしです。一番古いもので昭和50年7月30日、一番新しいもので昭和52年6月の日付があります。すべて、弘前の入らない「今晃」のみの署名です。一番古いものには、長谷川辰雄型の墨書が、今さん自身の手で書かれています。今さんの初作（左端）と思われます。

「11」 黄胴笑い口帯付き5寸7分、4寸3分、3寸4分です。すべて作り付けで、署名は、3本とも、「弘前 今晃」です。一番大きいこけしには、「昭和五十二年七月三十一日」の日付が入っています。鳴子に修行に出る前年の作です。5寸7分は、三白眼となっています。今さん自身は、胴底に「不良品 非売」と記していますが、量感の豊かな、魅力的な表情のこけしです。この三本は、ほぼ同時期に作られたこけしであるとおもわれますが、眼点の入れ方によって、これだけ



今さんは、昭和28年4月23日、秋田県大館市に出生し、昭和47年3月に大館鳳鳴高校を卒業後、奈良靖規さんの「大湯こけし工房」に入社、3年後の昭和50年4月に長谷川辰雄さんの下に弟子入りし、昭和50年半ばころから52年6月末まで、辰雄さんの木地下を挽きながら、辰雄型のこけしを製作し始めました。この間、51年10月に、辰雄さんの息子である健三さんが帰ってきて、一緒に木地を挽き始めました。健三さんの木地修行の進展に伴い、辰雄さんの元を昭和53年6月末で離れることになったのです。昭和52年7月から翌53年3月末まで「弘前 今晃」署名のこけしを製作し、「木の花」で戦後の佳作として取り上げられました。その後、昭和53年4月より、56年10月末まで鳴子の岡崎斉司さんに弟子入りし、本格的な木地修行に入ります。昭和56年11月には、鳴子より弘前に戻ってきて金属団地に居を定め、「こけしの館」で木地を挽き始めます。初めは、独楽入りの容器のおもちゃを作り、こけしは作っていませんでしたが、57年1月より4寸各種の試作を始め、1月23日ごろに、復活初作を発表しました。



「13」 私の手元にある「弘前 今晃」の署名のある全こけしです。このうち、4本に、今さん自身の手で日付が入れられています。作り付けの黄胴笑い口帯付きの最大のものが52年7月31日、黒頭の菖蒲が52年10月6日、黒頭ではない菖蒲が52年11月22日、「ぶつつら」が

53年2月20日です。「12」と併せて見ていただければ、今晃さんの初作に近いこけしの全体像が、かなり見えてくると思います。

「14」 青森県岩木町嶽温泉近くの開拓農家集落に移り住んだ今晃さんの嶽温泉土産「笹竹こけし」8寸と6寸、白胴と黄胴の4本です。昭和58年7月に製作されたもので、嶽温泉の食堂兼お土産屋さんに委託して、販売してもらっていたものです。



同年8月24日に売れ残っていたものをすべて引き取り、桑原さんと分けました。このこけしは、金次郎型の顔に、地元の名物、地竹の子の笹の葉の胴模様を、笹竹の茎を意識した胴に配したものです。胴底には、「嶽 今晃」、胴裏には「嶽温泉」の墨書があります。私には、津軽の風土にマッチした良いこけしに見えますが、観光客には殆ど売れなかったようです。作った殆どが、私達二人のコレクションに納まりました。今さんは、58年5月31日に弘前市禰宜町を離れ、嶽牧場と呼ば

れている開拓農家集落に移り住みました。しかし、轆轤用の配電工事の遅れで、嶽でのこけしを製作し始めたのは、6月の末で、私が「嶽 今晃」の署名の入ったこけしを入手したのは、6月27日でした。それからすぐに、本来の用途である温泉土産を意識して作られたこけしが、この笹竹こけしになります。よく見ると、6寸白胴だけが紫と赤の轆轤線で、後はすべて、緑と赤の轆轤線です。私の手元にあるこの時の8寸こけし、6寸こけしで、紫と赤は、6寸白胴3本中2本だけでした。観光客に受けなかったのは残念ですが、殆どすべて売れ残っていたことは、幸せでした。

今さんのこけしは、あまりにも昔の津軽的なものであって、今の津軽の人々には違和感が強すぎるのかもしれませんが。仙台の佐藤昭一さんは、自らを「後ろ向きのアヴァンギャルド」と呼んでいましたが、今さんにその形容がよく合っているように思います。「あるべき津軽こけし、あったはずの津軽こけしを幻視して、それを次々に現実化して行った。」と私は考えています。

「15」 6寸笹竹こけし3本です。これらは、すべて、製作時期が異なります。向かって左端は、「14」と同じ時期の作で、昭和57年7月、中央が、58年11月26日、向かって右側が59年3月29日作です。一番早い手は、「14」にあるように、温泉土産として作られた初作で、後の2本は、収集家用



に、東京の大木さんに発送されたものです。したがって、初作は、殆ど市場には出回っておらず、残りの2種類が収集家の手があることになります。この収集家向けの2種類では、最後の手がよいように思いますが、概して今さんのこけしは、「初作の20本程度が最高のできである。」と感じていました。売れ行きが良くて、注文が入り、2度、3度と製作すると、初作を凌駕するものはなかなか出来て来なかったように当時から感じていました。初めて新たな作品を生み出すエネルギーの集中や緊張感のせいでしょうか。自分でもコントロールしようとしてもどうしてもできない条件なのでしょう。しかもこの時期、今さんは、筆の動きのままになりにくい筆法を取っていたように思います。それが、時には傑作を生み出していたことも事実と思うのです。



「16」 弘前市金属団地に住み、「こけしの館」で製作していた頃の今晃さんの4寸こけし3種です。向かって右端は、1月25日ごろの三上文蔵型ペンシルこけしです。これには、黄胴轆轤模様のみを作り付けとはめ込みがありますが、このこけしは、白胴に文蔵さんの朝日菊が描かれています。 残る2本は、57年4月の製作で、中央は10日、向かって左側の「オド菖蒲」は13日の日付が、私の手に入っています。この頃は、1週間に2回程、こけしの館に通っていましたから、製作年月日は、それほど

隔たっていないはずです。

「17」 「こけしの館」で木地を挽き始めて約1ヵ月後の今晃さんのこけし頭部型の容器で、内部に逆立ち独楽2個を含めて、6個の独楽が入っています。内一つは一組の2階独楽で、一つを指でひねって廻してから、その上に、2階部分の独楽を同じ方向に廻しながら乗せて遊びます。この容器は、鳴子から帰ってき



て、こけしの顔を描かない普通の独楽入り容器を作っていた今さんが、1月下旬に入
ってこけしを発表し始め、その後、2月16日にこけしの顔を描いた初めの作と思
います。底は仕上げてありますが、署名はありません。



「18」 今晃さんの金熊（金太郎に熊）です。底
には、内祝と今さんの長男の名前、それに「晃」の署
名がありますから、20年ほど前のものでしょう。今
さんから頂いたものですが、その後、お願いして、再
度作っていただいたものが、手元にもう1点あります。
突き出た大きな乳房のような形態に、下方に大きく熊
が描かれていますが、いかにも「参った。」とでも言
っているような表情がユーモラスです。熊が描かれな
ければ、ここに熊がいるとは到底思えません。でも、

今さんには、ここに熊がいるのが見えているのでしょう。乳頭にあたる部分には金太
郎の顔が描かれ、更に金太郎の腕と胸が加えられ、後は余白となっています。この余
白の部分は、腹から下肢に見立てられているのです。



「19」 今晃さんの金鯉（金太郎に鯉）です。これ
は、私の長男の小学校入学祝のお返しとして、今さん
に10数個作っていただきました。昭和61年4月1
0～11日の作です。 金太郎の顔は、金熊とほぼ同
じですが、これには金の字の腹掛けが描かれています。
そして、お腹の中央部と鯉の下部にほぞ穴をあけ、ほ
ぞで接合しています。ちょうど、お腹に鯉を抱えてい
る様になっています。金太郎の本体は台に、またほぞ
で取り付けられていますが、金太郎の底のほぞ穴は斜
めにあけられ、向かって左側に少し傾いています。そ

れによって、右側に大きく張り出した鯉とバランスをとっています。台には、青の渦
巻きが描かれていますが、これは、轆轤に取り付けたまま、手でゆっくり廻しながら

描いたものでしょう。水の中から鯉を抱えて浮かび上がってきた金太郎の一瞬を見事に捉えた作だと思います。写真では、白に緋が入った鯉の手を写しましたが、多くは、真っ赤な緋鯉の手でした。私の手元には、緋鯉が2点と計3点あります。



「20」 今晃さんの鯉車です。一筆目の幼児が鯉に乗って、大空を泳いでいる姿を描いているのでしょうか。車の軸は鯉本体の中心部からかなり下方にオフセットしてあけられており、それによって、ちょうど最適の傾きが得られています。鯉の描き方も、鯉であることがわかる最小限の描彩で、今さんのこけしを含む玩具の本質として、今晃こけしファンの屋根さんが喝破した「省略と飛躍」の好例でしょう。それは、描彩だけでなく、形態にもいえることで、鯉にしても、その上に乗る幼児にしても、必要最小限度に簡略化されています。

「21」 - 「省略と飛躍」に寄せて - 今こけしファンの屋根さんが、今晃こけしのこけしの本質として、ブログ「今晃の世界」の掲示板に、「省略と飛躍」をあげておられました。「18」の金熊は、その好例ではないかと思っております。省略については、おっしゃるとおりだと思います。そこで問題になるのは、省略がいかになし飛躍につながるか、それを生み出すのに必要なものは何か、だと思います。すでにあるモデルを写すのは容易なことだと思いますが、飛躍を生み出すのは創造のエネルギーであり、生み出すための苦闘なのでしょう。ですから、優れたものを写していると、自然に良いものが生み出されるといった素朴な写し論には疑問が生じます。写しは、確かに優れたものを生み出すためのひとつの方法であるとは思いますが、それを越えて何かが新たに生み出されなくては、伝統的なものも生命力を獲得できないのではないのでしょうか。私は、少数者がその創造の苦闘の中から新しいものを生み出し、それが、全体の水準を引き上げ、大勢がそれに追いついていき、さらにその中から、また新たな少数者が、新たなものを生み出すといったダイナミズムがあるように思っています。いまひとつの点は、こけしは素朴なものかという疑問です。素朴の定義にもよりますが、飯坂の栄治こけしのような、おどろおどろしいものがこけしの始原的

なもののだとしたら、それは素朴という言葉でくれるか、ということです。また、蔵王高湯の明治年間の華麗な仙台屋（栄次郎）こけし、鳴子の勘治尺1寸5分や『這う子』の伝大沼又五郎もあります。これらはすべて、初めから飾ることを目的として作られた上手者と呼ばれるこけし群であったように思います。これ以外に、もちろん、温泉みやげとして、子供のおもちゃを目指して作られた下手物もあるわけです。きれいさびの範疇に入るものもあれば、原初的なものも、又、素朴なものの、その中にはあります。私は、今さんの嶽移住後のこけしを、「原初的な津軽こけしのあるべきもの、あったはずのものを創作することではないか。」と論じたことがあります。その意味で伝統創作こけしとして、今さんの写しとは無縁な創作こけしを名づけました。そこでは実際にはなかったが、あっても当然であるような津軽こけしが続々と生み出されました。それは、素朴といえば素朴であるが、「生命力にあふれた、きれいごととは無縁な、こんな子供がいたいた。」と思えるようなこけしでした。

最後の一点は、自然に原初的なこけしが生み出される条件はすでに失われたという点ではないでしょうか。そのために写し・復元が方法論として導入されたわけですが、前述のように、写しがいかにして命あるものに転化するかが問題です。そこには、少数のものの力でこけしの水準全体を引き上げる動きがなくてはなりません。例えば、巳之助さん、福寿さん、昭二さん、英太郎さん、文吉さんといった復元運動の第一波の人々の存在がありました。それに続く、六郷さん、国分さん、稲毛さんといった第二波の人々もいました。第二波の人々が生み出したのは、マチエールを含めた新たな復元、写しの誕生だったように思えます。その人々の上に、今さんの写しと創作が登場したように思えます。そこで必要だったのは、今さん自身のあるべきこけしを幻視する力だったように思います。美意識といってよいのかもしれませんが。それは、辰雄さんの弟子になった時点ですでにあったものなのでしょう。しかし、それに自分の手がついていかない、という深刻なディレンマがあったのだと思います。それは、すべての創作者に共通する葛藤です。そこで、3年半という鳴子の岡崎さんのもとでの木地修行が必要になったのだと思います。弘前に戻ってきても、今さんはすぐにはこけしを挽きませんでした。およそ2ヶ月の潜伏期間を経て、少しずつこけしを挽き始めて、3月から4月にかけて世評に名高いこけしを作りますが、本人はそれに飽き足らなかったように思えます。新たな線の工夫、木地の工夫を試みたその後の金属団地・禰宜町時代があり、それが集中的に花開いたのが、嶽初期のこけし群だったように思

います。私は、今さんの嶽初期のこけしを最も高く評価するものです。

最後に、一人のこけし作者の中での歴史がどうなっていくかということと、こけし全体の歴史がどう展開されていくかという、違った問題があります。先ほどの復元の第一波、第二波、今さんの登場は、後者です。いわゆるピーク期のこけし論は、前者でしょう。私が気になるのは、特に、ピーク期のこけし論です。あまりピーク期を強調すると、ピーク期以外のこけしが、こけしとして質の一段と落ちるものとみなされる恐れがあります。むしろ、それぞれの時期のこけしを丹念に見ていって、質こそ違え、それぞれに時期のよさはよさとして評価することが必要なのではないのでしょうか。円熟期は円熟期の良さ、若いときは若いときの良さ、年老いたときは年老いたときのよさが、違ったものとしてあるといえるように思います。今さんは、いくつもピークがあるでしょうし、私は、松三郎さんの晩年の自挽きのこけしには、上品な穏やかなよさがあるように思います。

屋根さんの省略と飛躍論から、我田引水になってしまったようです。いずれまた、展開したいテーマをいろいろ書いてしまいました。屋根さんに感謝して、この辺で一応終わりとします。

(今晃こけしファン倶楽部の掲示板「今晃の世界」に投稿した記事を再掲させていただきました。屋根氏の「省略と飛躍」については、同掲示板をご覧ください。)

釣り目の内裏雛は昭和59年3月9日の作です。それよりやや大きい、釣り目ではない内裏雛も同年の作と思われます。最小限の描彩と、余白に無限のものを語らせる手法は、今さんのこけしを理解する重要な手がかりと思われます。もちろん、今さんのお雛様には、有彩のものもありますし、フル・セットのものもありますが、このモノ・クロームの内裏雛は、私の最も好きなものです。





「21」 重ね菊帯付きの8寸と6寸です。8寸向かって左側と6寸は、鳴子から帰った翌年（57年）の4月、8寸向かって右側は同年3月の作です。8寸を比べると、3月と4月の作では、バランスが微妙に異なっているのが見てとれます。6寸は、私の手で、4月26日の入手年月日が書かれており、桜祭り期間中に、こけしの館で入手したことがわかります。原寸は8寸の写しだったと覚えています。私はこの6寸を最も高く評価します。もっとも、他のものも、それぞれ水準以上の作行きとは思っています。金次郎こけしのよさを今に伝える

る好例だと考えています。

「22」 黄胴笑い口帯付き7寸と6寸です。7寸が原寸で、7寸は昭和57年4月26日、6寸向かって左側が同年2月2日、右側が3月の作です。私は、4月26日の作、7寸を最も高く評価しますが、6寸もそれぞれ捨てがたい味があると思っています。同じ頃に製作された4寸ともども見ていただければ、この47年4月の作がいかに充実していたかがわかると思います。しかし、今さん自身は、これに飽き足らなかったようです。今さんの目はもっと高いところ、あるいは別のところにあったように思います。この後、一つには木肌のマティエールをどうするかと言う問題と、線をどうするかと言う問題に取り組みます。ある程度は、形をどうするかと言う問題は解決済みだったのではないのでしょうか。目の高みにどう手の水準を近づけていくかと言うことです。両者がある程度一致を見るのが嶽初期ではなかったのでしょうか。ただ、目はどんどん高みに上っていきます。目と手の追いかっけは延々今まで続いているようです。私は事情があって、平成4年頃で、こけしの収集を中断しましたので、今さんのその後の展開を細かく追いかけてはいません。それでも、今



さんに顕著なマンネリはなかったようです。稀有な職人・アーティストではないかと思っています。



「23」 5寸こけし2種です。描彩、形態ともに完全な鳴子系ですが、昭和57年金属団地に住んでいた頃の作と思われますので、津軽系に分類しました。この2本のこけしには署名はありません。昭和58年5月10日に禰宜町で分けていただいたものですが、面描からすると、金属団地に住んでいた頃にこけしの館で、売り物にする気がなく、習作として製作したものではないかと考えています。立ち子では、胴の裏模様として、百合の花が、こけし型では片栗の花が、描かれています。

「24」 弘前市金属団地に住み、こけしの館で製作していた頃の黄胴笑い口帯つき作り付けの5寸と4寸です。4寸は昭和57年8月10日の日付が入っています。弘前ねぶたが終わった直後に、こけしの館で今さんから直接入手したものです。5寸は、翌年の4月17日に禰宜町で分けていただいたものですが、鉛筆で57年8月作の字が、私の手で入れられていますから、今さんが手元においていたものを後から分けていただいたものです。ともに、私の手で、愛こけしの文字が入っていますから、植木さんのコレクション中のこけしを写したものです。



「25」 島津彦三郎型7寸と6寸です。6寸は、昭和57年7月28日入手で、金属団地・館時代の作で、7寸は翌年の4月10日、禰宜町での作です。前者では、蠟引きこそ施していませんが、木地はかなり磨きこまれており、線引きも、偶然の要素の少ない、自分の意思が筆先に直に伝わるものとなっています。それが、表情の差となって現れているのではないのでしょうか。どちらを好むかは

人によるでしょうが、この禰宜町におけるアヴァンギャルド的な実験がなければ、津軽の風土性を色濃く反映した今晃こけしの爆発的な開花はなかったのではないのでしょうか。



「26」 長谷川辰雄型のエジコで、「弘前 今晃 昭和五十二年八月二十六日 H 宅にて」の文字が、今さん自身の手で入っています。長谷川さんの元を離れて、弘前で独立し、翌年には鳴子の岡崎斉司さんの元に修行に出る、その時代のもので。胴のけしの花の模様は、辰雄さんがこけしの胴模様としてよく描かれますが、花びらの外側が、微妙に、ぼかしになっているのが見て取れます。頭の上には、遠刈田の小寸モノの古式描法に見られる蝶型に近いものが描かれています。



「27」 赤と紫の伊太郎型7寸です。昭和58年4月22日作の文字が入っています。このこけしの目のアップに注目してください。この線は、嶽初期に特徴的な、偶然性を許す、自由度の大きい、筆先に線の引き手の意思の伝わりにくい筆法で書かれていることが明瞭です。それでいて、三白眼のこの迫力のある表情が出せているのですから、今さんの実験が、この頃一応実を結んだものと考えてよいでしょう。このこけしには、3寸前後の小寸物がついています。この頃から、本品とともに、ずんぐりした小寸を一緒に製作して、同じ表情で、違った味を楽しませてくれる試みも始まりました。

「28」 尺7分、三上文蔵型のこけしです。瞳を白く残していますから、辰雄さん描彩、文蔵さん木地のこけしの写しでしょう。このこけしの見所は、第一に形態に見ら



れる量感、第二に、上品でおとなしい女のこの表情でしょう。特に、白く瞳を残した目の表情は、小寸でも、大寸でも、私達を不思議にひきつけます。昭和63年8月14日の作で、署名は「晃」のみです。嶽の入っている時代であろうが、入っていない時代であろうが、関係なく、良いものは良いということです



「29」 山谷多兵衛型 尺5寸5分、尺1寸1分、尺4分です。署名は、「嶽 今晃」です。大寸であろうが、小寸であろうが、破綻を見せない見事な造形感覚です。大寸物の場合は、今さんの禰宜町から始まる自由度の大きい筆法のよさがフルに発揮されます。また、胴模様は、上方と下方に轆轤線3本ずつですが、それでも、特に淋しくは感じられません。下方の轆轤線の間隔にヴァリエティを持たすことによって、過不足のない胴模様を構成しています。

「30」 村井福太郎型 尺4寸2分です。昭和61年2月26日の作で、一緒に今さんのこけしを集めていた桑原さんの退職記念として、桑原さんにいただいたこけしです。底には、今さんによって製作年月日と、「桑原さん退職記念 贈 清殿 嶽 今晃」と、墨書があります。頭頂には、フリーハンドで二重の墨の輪が描かれています。福太郎型によくあるように、眉は描かれず、鯨目の瞳は白く抜かれています。



す。木地福太郎さん、描彩辰雄さんによる福太郎型です。形態的には、鳴子のこけしに近いものですが、胴中央に向けて太くなり、中央でくびれ、再度鳴子風の下部へと続きます。

中央のくびれには、5本の赤い轆轤線が引かれ、その上下には、表から裏まで、一面に、菊模様が描かれています。



「31」 島津彦三郎型 尺1寸2分と、尺4分です。制作年代は、底に「嶽 今晃」とあり、入手年月日、コレクション

ン番号が書いてありませんから、その署名から「晃」のみになる、直前のものと思われます。私の手元には、このほかに表情の少し異なった尺5寸二本がありますが、1本は嶽の文字が入り、1本は晃のみですから、丁度その境目に製作されたものです。この2本では、尺1寸2分が私の好みです。生き活きとした目に、団子鼻、グラッと笑った口が、生命力にあふれた津軽の娘を現しています。尺4分は、おとなしい津軽娘となっていますが、いずれ劣らぬ高水準の写しとなっています。胴模様は、上下の轆轤線に、中央に細い一本の赤い轆轤線が引かれています。それだけの轆轤線で、胴模様としては十分に完成されています。大鰐の津軽こけしの本質をよく表しているこけしと言えると思います。



「32」 鉋彫りこけし尺2寸5分と、尺1寸5分です。胴底は、チェーンソーで切りおとされたままですが、「昭和63年5月吉日 晃」と署名されています。今さんは、数こそ多くはありませんが、禰宜町の頃から、何度か鉋彫りのこけしを製作しています。初めは、こけしの館を離れ、轆轤を注文したが、なかなか来ないので、鉋彫りを試みたと言うのがきっかけのようですが、その後も何度か鉋彫りを作ったと言うことは、そこに自分の作品の可能性を見たと言うことだと思います。考えてみれば、盛

秀太郎さんの項で述べたように、今さんは、「盛さんの鉋で木取りした木地下が、それだけで十分完成されている。」と感心していました。それだけで鑑賞に値すると思っていたようです。轆轤を使うことは、それだけ造形手段としては不自由になるということです。陶芸にしても、轆轤を使わずに、手日練を試みるのは、轆轤を使うことによる不自由さを嫌うからでしょう。もっとも、轆轤による不自由さと言う制約の中で初めて得られるものもあるのです。ですから、殆どすべての製作を、轆轤を用いてやり、時に、轆轤を離れて、鉋彫りをやってみたくなるのでしょう。そこで生み出された人形は、原初的なものとなりました。皆さんはどう評価されますか。こけしとしてと言うよりは、人形の造形として。墨と赤のみの菊模様も、原初的人形にふさわしい装飾に思えます。



「33」 昨日とどきました今晃さんの金属団地・こけしの館時代のこけしとエジコ計6点です。昭和57年3月から7月にかけての作品です。実は、年のせいか、早朝3時に目が覚めてしまい、眠れないままにコンピューターに向かっていたところ、同じ出品者からこの6点がまとめて出ていました。2時40分ごろにアップロードされたものを3時20分ごろに即決価格で落札しました。殆どすべて持っていましたが、この頃の今さんのこけしには、たまらなく魅かれるものを感じます。いずれ、1点ずつ手元にあるものと比べながらこのブログで取り上げたいと思いますが、速報として掲載するものです。この金属団地時代、特にその初期をどう評価するかは非常に興味があるところです。嶽初期とどちらを高く評価すべきなのか。市場はどう評価するのか。鳴子修行前と比べるとどうなのか。いずれ、私なりの解を出したいと思っています。また、こけしとエジコの取り扱いはどうなるのでしょうか。私は、エジコもこけしもともに好きですし、特に違った取り扱いをしようとは思っておりませんが、エジコを一段と低い取り扱いをする向きもあるようです。この2枚の写真を見比べて考えていただければと思います。

「34」 重ね菊6寸です。鉛筆で「57-3-1」と書いてありますから、制作は、2月中旬から下旬にかけてでしょう。復帰初作が1月末ですから、その1ヵ月後の作品です。3枚目の初作の4寸と比べると、形態、描彩ともに、3月の充実した作行きに近づいて居るのが見て取れます。3月に入ると、重ね菊はより太い花びらの重ね菊が中心になります。この細い重ね菊の手の充実した作品が入手できたのは幸運でした。





「35」 黄胴笑い口造り付け4寸です。「57-3-19」の鉛筆書きがありますから、57年3月の初旬から中旬にかけての金属団地・こけしの館時代の作です。形態的にも、また、三白眼の強い凝視の表情といい、素晴らしい作です。4本並んだ左から1本目の3月末から4月初めにかけての作に勝るとも劣らないと思います。もちろん表情は、三

白眼と普通の表情の違いがありますから、好き好きですが、57年3月が師匠である辰雄さんの普通の型の充実期であるのは、このこけしを見ても自明であるように思います。右から1本目の試作、2本目の初作と比較してご覧ください。

「36」 写真のこけしは、「57-6-13 つどい」との鉛筆書きがありますから、習作期、充実期に続く次の段階の作品と思われます。辰雄さんのちょっと情けなさそうな表情をよく写しているようにも思えるえじこです。別な言い方をすると、充実期の表情が、少し弱くなっているということも出来そうです。右のえじこと見比べてください。向かって左側のえじこには、「S57. 3. 中」との鉛筆書きが私の手であります。いわゆる充実期の作ですが、表情は、確かに、このえじこの方がずっと強く見えます。同じ時期のえじこが、他に4個ありますが、表情はすべて同様に強く、すべて黒頭です。不思議なのは、このえじこが、サンドペーパーを用いて滲みのないきれいな轆轤線を引いているのに対して、57年3月のえじこはすべて木賊のみの仕上げのために、禰宜町や嶽の時代のもののよう、轆轤線ににじみの目立つものになっていることです。おそらく、サンドペーパーによる仕上げの質感に飽き足らなくなって、こけし



の館で試作的に作って棚に並べておいたものを、私が殆どすべて持ってきたものではないかと思います。その後も、東京に出て行ったこけしやえじこは、しばらくの間、木賊とサンドペーパーを使った仕上げになっています。



「37」 茶の伊太郎型のえじこです。胴底には、「57. 8」と鉛筆書きがあります。昭和57年7月から8月にかけての作品で、茶の伊太郎を作り始めた頃、8寸の原の写しとともに作ったもの

でしょう。生き生きとして強い凝視力の表情は、充実期のこけしのようです。左のえじこには、「S 57. 7. 28」と私の手で記された茶の伊太郎です。それほど強い表情ではありませんが、ほぼ同じ時期と考えてよさそうです。今さんは、不思議な作者です。ある型をはじめて作るときには、充実した凝視力の強いこけしを作りますが、2度目、3度目となるにつれて、調子が少し落ちてくるように思います。ですから、今さんのこけしには、ピーク期がいくつもやってくるのです。新たな型を創り出すときは、いつでもピークがやって来るといっても良いのです。時期としてのピーク期というよりは、型ごとのピーク・充実期なのでしょう。確かに、新たに型を写したり、創り出すときは、ロケットの発射のときのように、初めに最大のエネルギーを必要とします。その最大のエネルギーが、充実した強い業視力を生み出すようです。

「38」 佐々木金次郎名義、長谷川辰雄描彩のえじこの忠実な写しです。原は、昭和5年頃の作で、木の花第拾九号に矢内謙次氏の解説と写真があります。木地の仕上げや線の質からすれば、金属団地・こけしの館時代の比較的早い時期のえじこと思っていますが、どうでしょうか。胴底に鉛筆書きがないのではっきりしたことはわかりません。





「39」 島津型小寸6本です。左から3本は、嶽初作で58年6月27日の入手です。その直前の製作です。右側2本は6月30日、3本目は7月6日の入手です。

私の大好きな島津型です。ただ、この嶽初作こけしには、署名に「嶽」の文字が入っていません。（署名は「今晃」です。）島津型以外の初作小寸こけしにも「嶽」の文字は入っていません。禰宜町のこけしと間違えないようにしなければなりません。



「40」 島津型6寸です。昭和58年7月10日の入手で、その数日前の製作と思われます。緑の胴模様には、「嶽今晃」の署名がありますが、赤には、「嶽温泉 今晃」と署名しています。このときから、今晃の署名以外に嶽の文字が入り始めました。私は、このこけしが今さんの初期嶽こけしの代表作と考えています。今さんは、5月末に禰宜町を離れて嶽に移住します。しかし、電気工事の話の行き違いで1ヶ月間こけしを挽けませんでした。その間の全エネルギーをぶつけて、「39」と「40」の島津型が製作されました。その後、精力的にさまざまな写しや創作津

軽こけしが生み出されていった訳です。その嚆矢のこけしとして、これらの島津型はエポック・メイキングです。でも、禰宜町末期にも、実は同じような味のこけしが作られていました。いずれそれを取り上げたいと思っています。

「41」 福太郎型3寸です。昭和59年5月24日入手ですから、嶽移住1年後のこけしです。旧友であり、津軽こけしを中心とした大収集家である弘前在住の安達彰さんが、福太郎型の大ファンであることを知り、しまっておいた箱の中から掘り出し



ました。私は、このような眉のない、白抜きの眼点の、辰雄さん描彩の福太郎型が大好きです。



「42」 福太郎（操）
型4寸7本組です。昭和
61年3月から12月
まで製作されたもので、
署名は「嶽 今晃」です。
これらの4寸は、今さん
からも直接入手しまし
たが、好きで好きで、後

で、大木さんからも数本入手しました（右から2本目のみ平成7年12月の作です）。
もしかしたら、この頃製作された福太郎型4寸は他にもあるかもしれません。

「43」 嶽に移住直後の今晃さんの小寸
こけしです。黒頭に重ね菊模様の金次郎型で
よいと思っています。寸法は3寸弱です。嶽
では、普通の寸法のこけしを作る場合でも、
よくこういった小寸こけしを作りました。昭
和58年6月30日の入手で、27日が本当
の初作でしたから、これも、初作といっ
てよいです。こういったずんぐりした小寸こけしのみが初作といっ
てよいこけしでした。



「44」 手絡金次郎型3寸弱です。「43」と
同じく、昭和58年6月30日の入手で初作といっ
ても良い作品です。泥臭さと強さを兼ね備えた津軽
こけしらしいこけしです。胴模様は緑の葉状だけで
すから、厳密には金次郎型とはいえませんが、特に
きつい手の方は、嶽初期のこけしを代表するもの
と思っています。



「45」 これも、6月30日入手の金次郎風小寸こけしです。こちらは、おかっぱに緑の葉模様で、これも、いかにも津軽らしいこけしです。この嶽最初期のこけしは、いずれも筆の上端の方を持って、意思が筆先に伝わりにくくあえてしながら引かれた線で、表情を構成しています。面白い効果を挙げているようです。

「46」 伊太郎風でしょうか。左3本は、57年6月30日、右端は7月1日の入手です。1日違いで、目の描き方が変わり、違った印象をかもし出しているのが分かります。このような小寸を作り、そして、加川さんの原



による金次郎一辰雄型重ね菊帯付き6寸と島津型6寸が生まれます。島津型は強烈に、重ね菊は上品に、全く対照的な作風でしたが、素晴らしいものでした。当時の写真と記事は、秋田こけし会通信にあります。機会がありましたら、ご参照ください



「雛1」 今晃さんの初めてのお雛さまで。お嬢さんが生まれて、初めての桃の節句に作られたものの内の一組です。今さん自身の手で、昭和五十九年三月の墨書があり、私の手で、三日の鉛筆書きが入れています。署名は、「嶽今晃」です。ともに、胴に『結実(長女の名前)』の文

字が入れています。

「雛2」 墨絵のお雛さまで。『雛1』の約1週間後に作られました。署名は「嶽今晃」のみで、



私の手で59.3.9作の鉛筆書きがあります。目は細い一筆眼となり、目じりが上がっています。胴模様は、最小限まで省略されています。



「**雛3**」 三組のお雛さまの中ではもっとも大きく、私が大好きなお雛さまです。胴模様はさらに省略されています。家では、中年のお雛さまといっていますが、女雛の気品のある表情が魅力的です。

「**雛4**」
今までで最大

で、女雛で高さが4寸3分あります。昭和59年3月7日入手で、墨絵のお雛さまの2日前です。結実ちゃんのお雛さまに続いて、このお雛さまを作り、その後に、墨絵のお雛さまを作ったことになります。この量感、存在感、生命力は津軽的かもしれません。



「**雛5**」 小寸のお雛さまで、昭和59年3月7日に入手したものです。「雛4」と同時です。今さんは、定寸のこけしを作った場合、同時にずんぐりした小寸を作ることが一般的になりました。このお雛さまもその手です。女雛で、2寸6分です。



「**雛6**」 墨絵の小寸のお雛さまです。墨絵のお雛さまの寸法違いの二組は、3月9日の入手ですが、この小寸は3月13日の入手です。小寸ならではの面白い雰囲気が楽しめるお雛さまです。





「雛7」 お雛さまフルセットです。今さんは、お嬢さんの初節句に内裏さまを作って、その後それほどたないうちに、雪洞と梅の花、三人官女、五人ばやしを作りました、その後、かなりたってから、左大臣、右大臣を作ったのではないかと思います。

というのは、両者のみ、「晃」の署名で、残りのすべては、「嶽今晃」だからです。



「雛8」 内裏雛です。底の署名は「晃」のみです。女雛と男雛の大きさに差はありすぎるように感じますが、面描から見て明らかに、一对の内裏さまとして作られたものです。製作年の記録は、残念ながらありません。

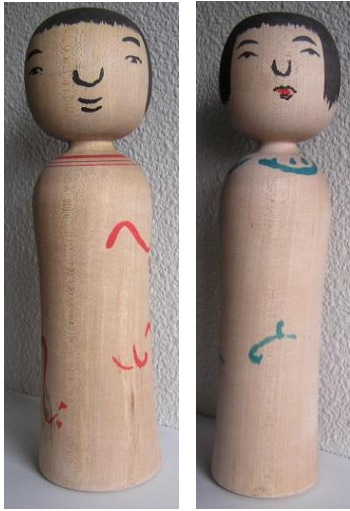


「雛9」 雛こけしの底には、「晃」の署名のみあります。制作年は分かりません。お分かりの方がいらっしゃいましたら、教えてください。



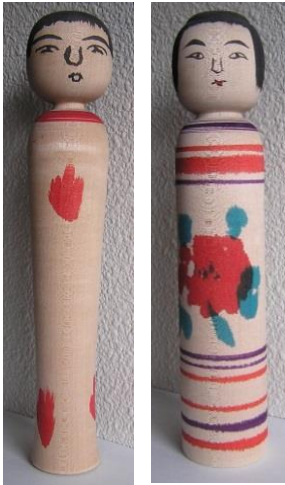
「雛11」 今さんが大湯時代にお世話になった大湯温泉「花海館」のご子息の結婚記念（平成12年1月1日）に作られた雛セットです。内裏さまの底

に「晃」の署名があります。山口に来てから、近さんから送っていただいたものです。



「59」 盛秀太郎風の8寸です。胴底の署名は「晃」です。温湯垂系の長おぼこで、胴模様は楓の散らしでしょうか。何かの写しを作ったというよりは、津軽系の古こけしとして、このようなものがあってもよいということで作られた、と考えるとよいのではないのでしょうか。私が、創作伝統こけしと呼んだものです。

「60」 秀太郎風8寸です。平成元年11月の作です。形態的には、初期の太い形態に、アイヌ模様を部分的に緑で入れています。このこけしは、私が交換教授としてアメリカ合衆国に滞在中に作られたもので、帰ってきてからとっておいてもらったものをまとめて入手しました。



「61」 弘前を離れた後の平成3年の作、8寸です。

「62」 斉藤幸兵衛型長おぼこ8寸です。平成5年12月23日の日付が入っています。形態、描彩とも、一級品の写しとなっています。

「63」 「這う子」の秀太郎こけしの写しでしょう。平成5年12月23日の作です。これは、桑原さんの懇願によって製作されたもので、市販品として作られたものではありません。

この手のだるまこけしなども所有しておられた。

「64」 平成6年8月10日の作、8寸です。形態的には温湯垂系ですが、描彩的には辰雄の描く大鰐垂系でしょう。





「65」 「這う子」の秀太郎の小寸を意識して、平成6年7月末に作られた5寸ものです。

「66」 今晃さんの5寸5分、「這う子」の盛秀太郎の小寸を意識したものでしょう。胴模様は創作ですが、堂々とした津軽こけしになっています。

「67」 平成6年12月7日製作の6寸で、盛秀太郎を意識した作でしょう。

胴模様は創作的なもので、縄文土器の火炎装飾を思わせます。津軽こけしは、縄文的なことがその持ち味ですから、弥生風を求めるのではないものねだりだと思います。



「68」 秀太郎の幸兵衛写しを、今さんなりに写した小寸です。平成2年7月中ごろの作で、桑原さんに今さんから送られてきたものを、「69」などと一緒に後で分けて頂きました。胴模様は牡丹です。



「69」 小寸盛秀太郎風です。平成元年1月中ごろの製作です。薄墨を使った鋭い凝視力の佳品です。

「60」 今晃さんの小寸です。平成2年12月と私の手で、鉛筆書きされていますから、津軽を離れてから、今さんに送っていただいたものです。この鯨目と笑い口は、島津型を意識したものでしょうか、それとも大正末昭和初期の盛秀太郎を意識したものでしょうか。いずれにしても、現在では今さんにしか表現できない津軽こけしになっています。さらさらと引き流した線、無造作な髪の描き方は、土俗的、呪術的、原初的で、縄文



的なエネルギーを感じさせます。きれいさを唯一の美の規準とすれば、このようなこけしは排除されることになるでしょう。その点で、鹿間さんの貢献は大なるものがあると思います。ただ、鹿間さんが活動していた頃の津軽に、今さんが登場していなかった（？）のは、残念なことだと思います。生硬な写しを高く評価せざるを得なかったのですから。鹿間さんが今晃さんの嶽初期をどう評価されたか、心から知りたいと思っています。



「61」 7寸です。私の手帳には「こけしガイド」の間宮明太郎写しとなっていますが、形態的には三上文蔵型、描彩としては、佐々木金次郎型でしょうか。向かって右のやや大きい方が昭和59年8月22日作、左がその直後に作られたものです。後者がやや明るい表情となっていますが、いずれも、津軽大鰐皿系の優品であることには間違いのないと思っています。個人的には、向かって右側が好みです。

「70」 秋田の桑原さんを2年ぶりに訪問し、一晚とめていただいて、今さんのこけしを語り明かしました。ここに取り上げたのは、平成元年頃からの作品で、私が交換教授としてアメリカ滞在中から、弘前を離れて今さんのこけしに触れられなくなった頃の桑原さん推奨の品々です。中でも、向かって左側の伊太

郎風のものが目を引きます。形態といい、表情の強さといい、健康で力強い津軽美人のこけしです。いわゆる「きれいさび」とは異なる、いかにも津軽らしいこけしです。







「清コレクション」

